

2020年度 学生による授業アンケート結果

1. 2020年度 授業アンケートの実施要領

1) 授業アンケートの対象科目

全ての授業形態（講義・演習・実験・実技・実習）の科目をアンケート対象とする。但し、受講者数 5 名未満の科目は担当教員が実施の可否を判断する。また、対象科目の選定に関する担当教員の希望はとらない。

2) 実施期間

前期：2020年7月15日（水）～2020年9月9日（水）

後期：2020年12月1日（火）～2021年2月6日（土）

3) 授業アンケートの質問

設問1：この授業へのあなたの出席状況（参加回数）について答えて下さい。

（選択式：択一）

回答群 a：毎回出席（参加）した / b：2/3 より多く出席（参加）した /
c：1/3 以上欠席（不参加）した

設問2：この授業の内容はシラバス（授業計画）通りのものでしたか？（選択式：択一）

回答群 a：シラバスに準拠していた / b：おおむねシラバスに準拠していた /
c：シラバスと少し違っていた / d：シラバスと全く違っていた /
e：シラバスを読んでいないので判断できない

設問3：この授業に対するあなたの満足度について答えて下さい（選択式：択一）

回答群 a：大変満足している / b：まあまあ満足している / c：あまり満足していない /
d：全く満足していない / e：どちらともいえない

設問4：『設問3』で『a』あるいは『b』と答えた理由は何ですか？（選択式：択一）

回答群 a：授業がよく理解できたから / b：授業がまあまあ理解できたから /
c：（理解とは関係なく）学修に有意義だと思ったから /
d：学修意欲が喚起されたから / e：その他（自由記述： ）

2020年度 学生による授業アンケート結果

設問5：『設問3』で『c』『d』あるいは『e』と答えた理由は何ですか？

(選択式：択一)

回答群 a：授業が全く理解できなかったから/b：授業があまり理解できなかったから/
c：学修に有意義でないと思ったから/d：学修意欲が喚起されなかったから
e：その他（自由記述： ）

設問6：あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？

(選択式：択一)

回答群 a：90分以上/b：90分程度/c：60分程度/d：30分程度/e：しなかった

設問7：あなたはこの授業の目的を達成させるためには、どのような授業であるべきだと思いますか？（選択式：2つまで選択可）

回答群 a：主に知識や技能・技術を学ぶ授業/b：(受講生の数に関係なく)自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業/

c：プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業/

d：知的におもしろいと思える授業/e：特に希望はない/

f：その他（自由記述： ）

4) 集計方法・区分

アンケート結果の集計は、以下の区分で集計する。

- ① 授業科目区分別（全学共通科目、学部共通科目、学科科目、教職・資格科目）
- ② 授業形態別（講義・演習・実験・実習）
- ③ 受講者数別（0～20人、21～50人、51～100人、101～200人、201人以上）
- ④ 担当教員所属の学部別
- ⑤ 担当教員所属の学科・全学共通教育
- ⑥ 個人別

2020年度 学生による授業アンケート結果

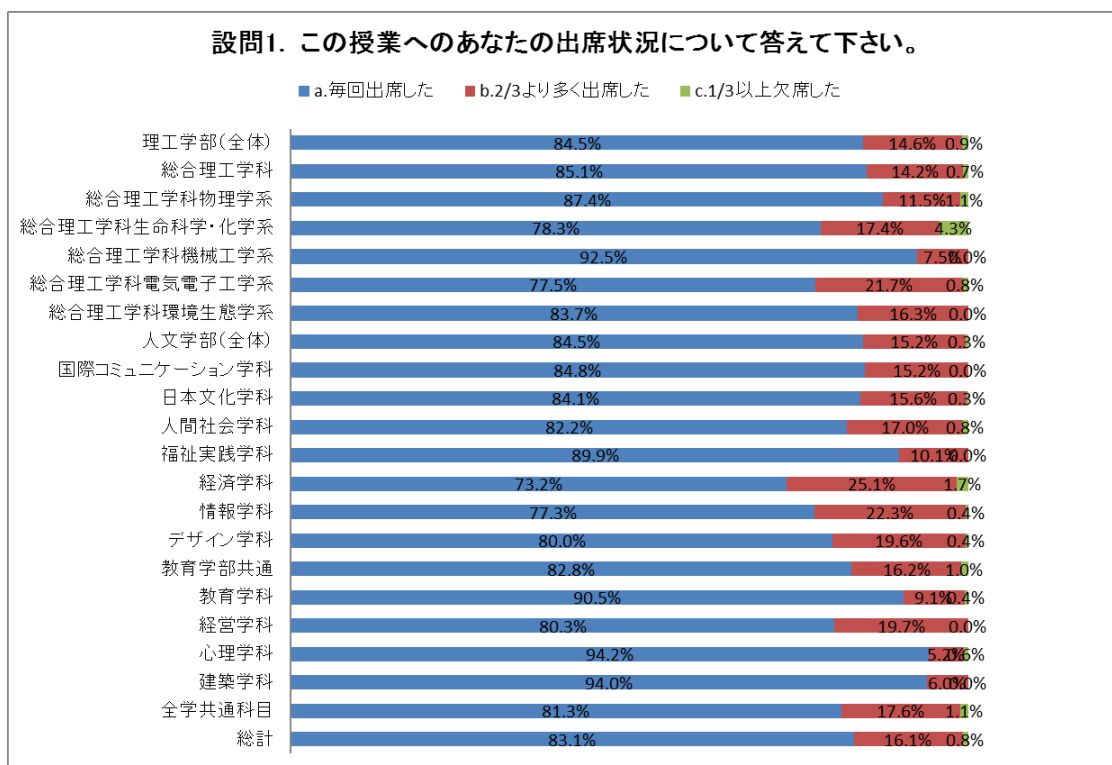
2. 2020年度 授業アンケートの集計結果

1) 対象授業数・回答者数

前期： 2546 科目（対象時間割科目数） 回答者数 23452（延べ数）

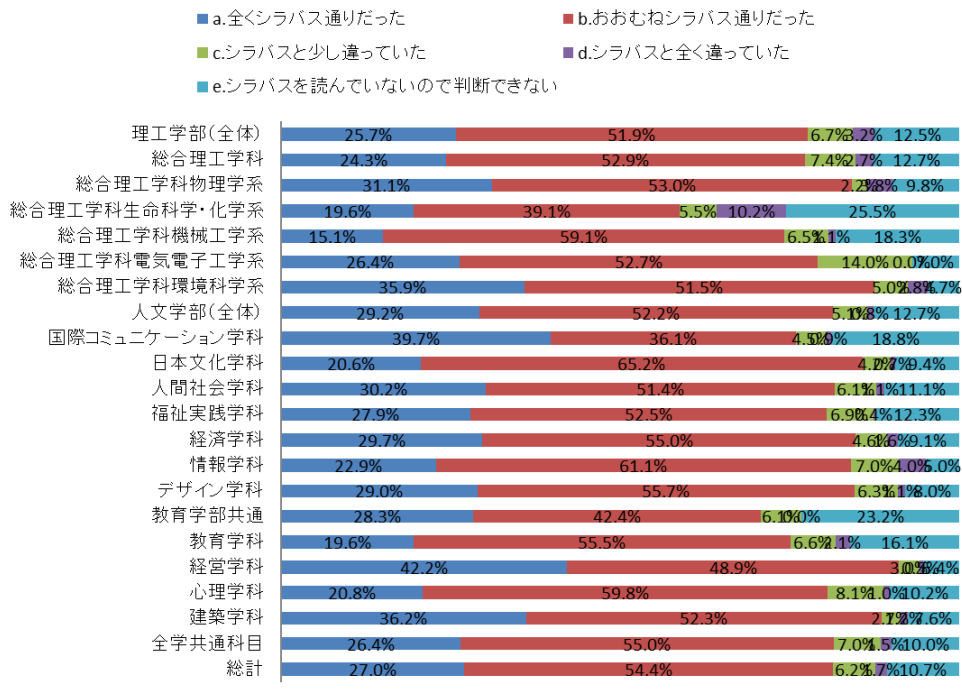
後期： 2415 科目（対象時間割科目数） 回答者数 13670（延べ数）

2) 前期集計結果



2020年度 学生による授業アンケート結果

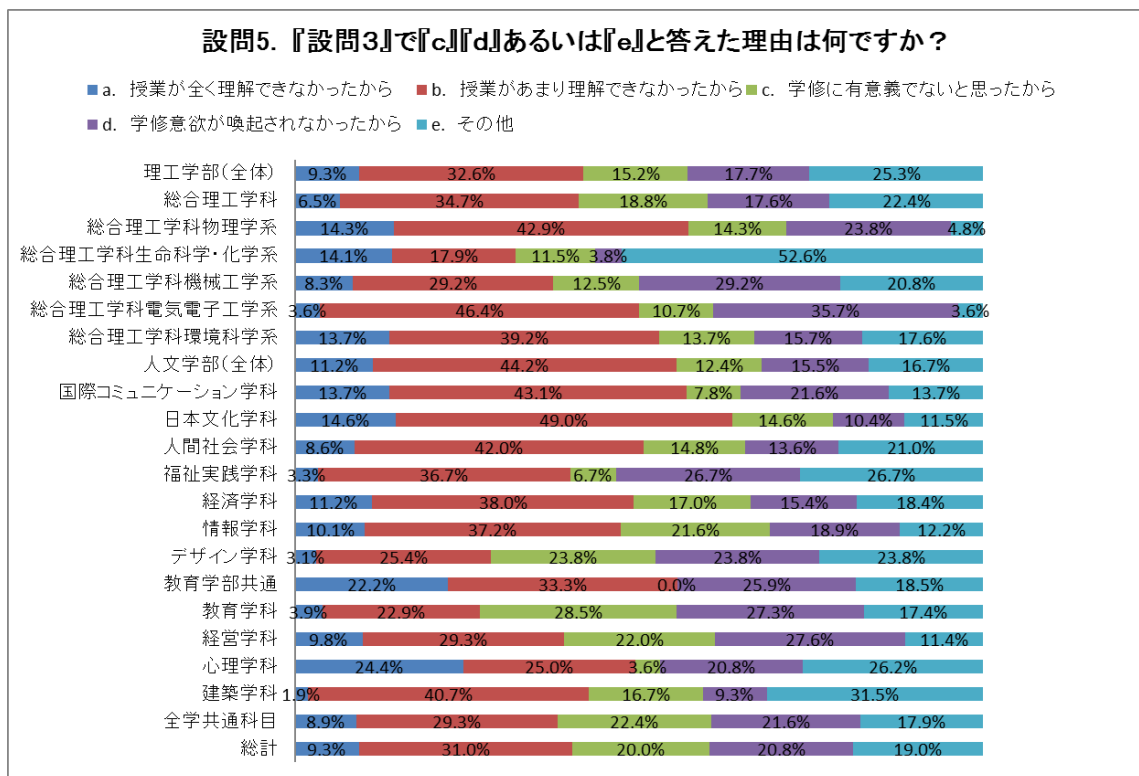
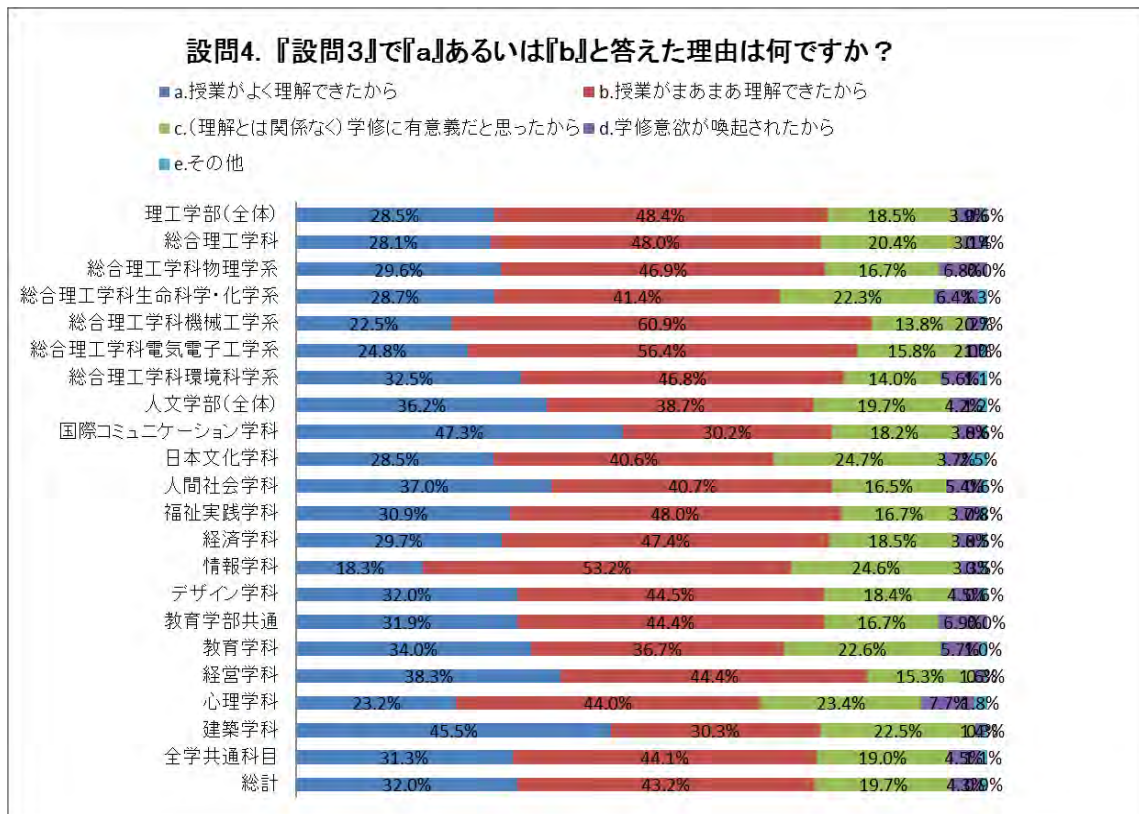
設問2. この授業の内容はシラバス(授業計画)通りのものでしたか？



設問3. この授業に対するあなたの満足度について教えてください。

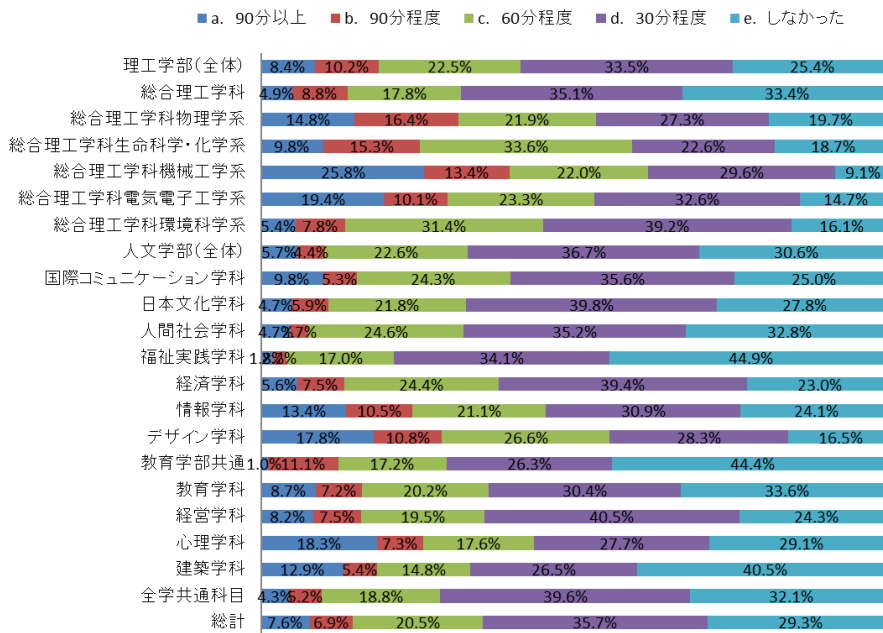


2020年度 学生による授業アンケート結果

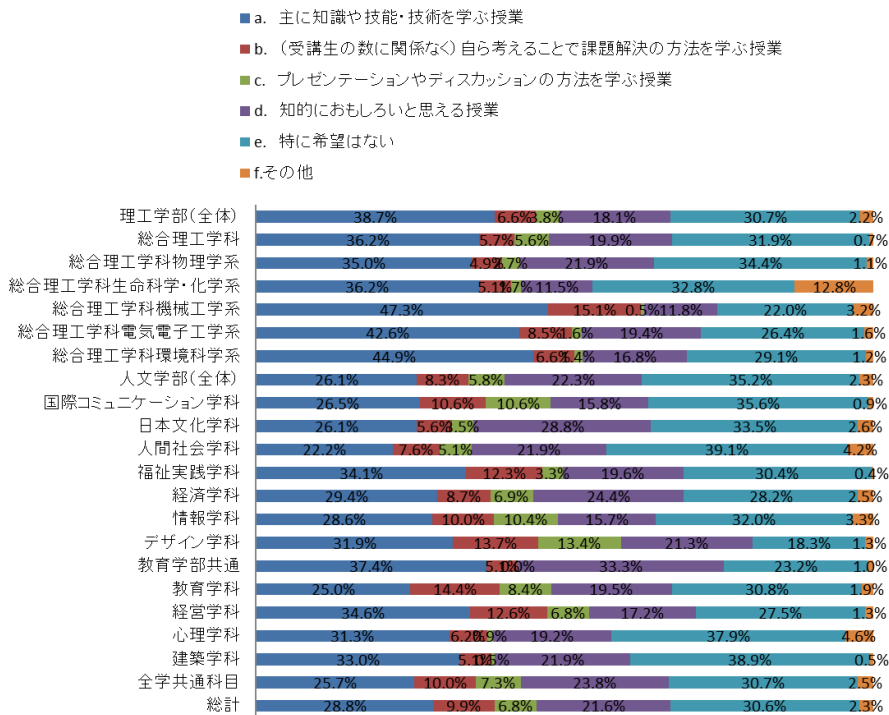


2020年度 学生による授業アンケート結果

設問6. あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？

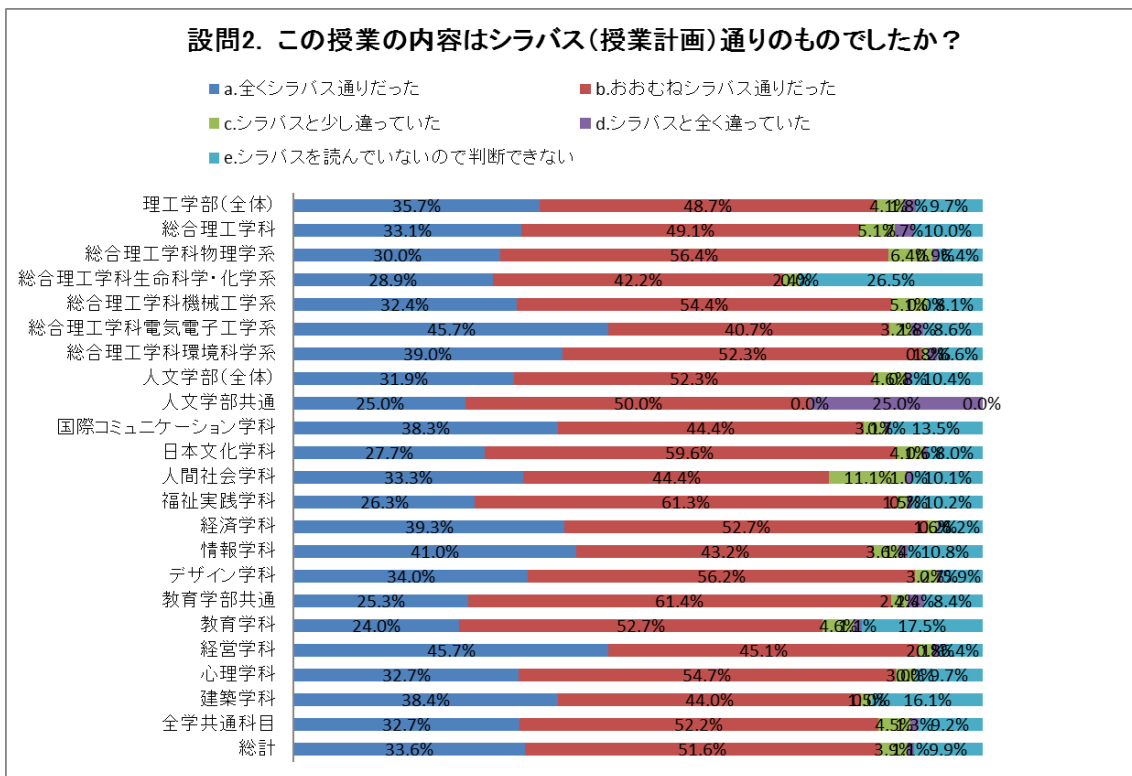
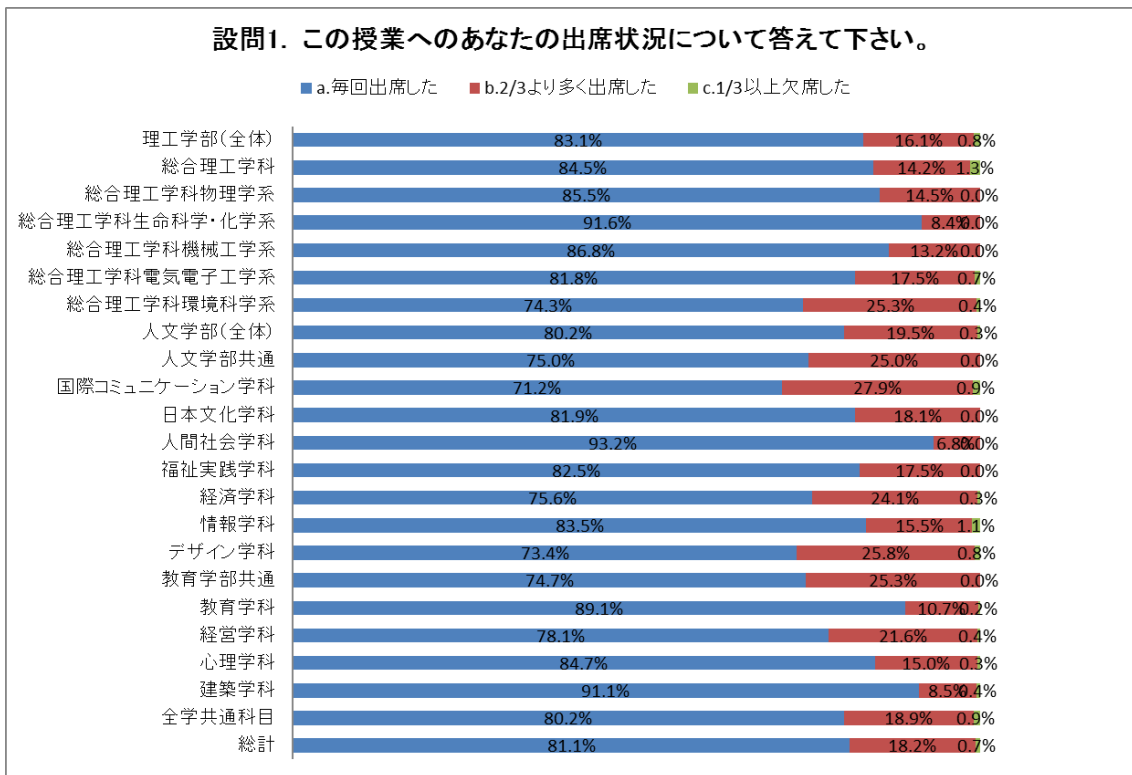


設問7. あなたはこの授業がよりよいものであるためには、どのような授業であつたらよいと思いますか？



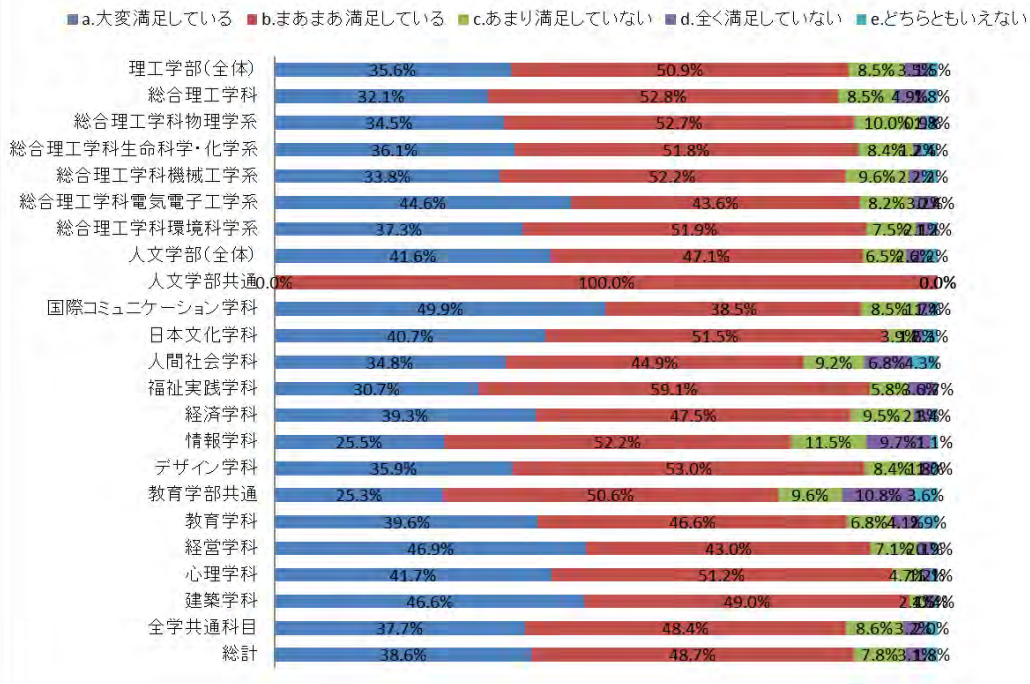
2020年度 学生による授業アンケート結果

3) 後期集計結果

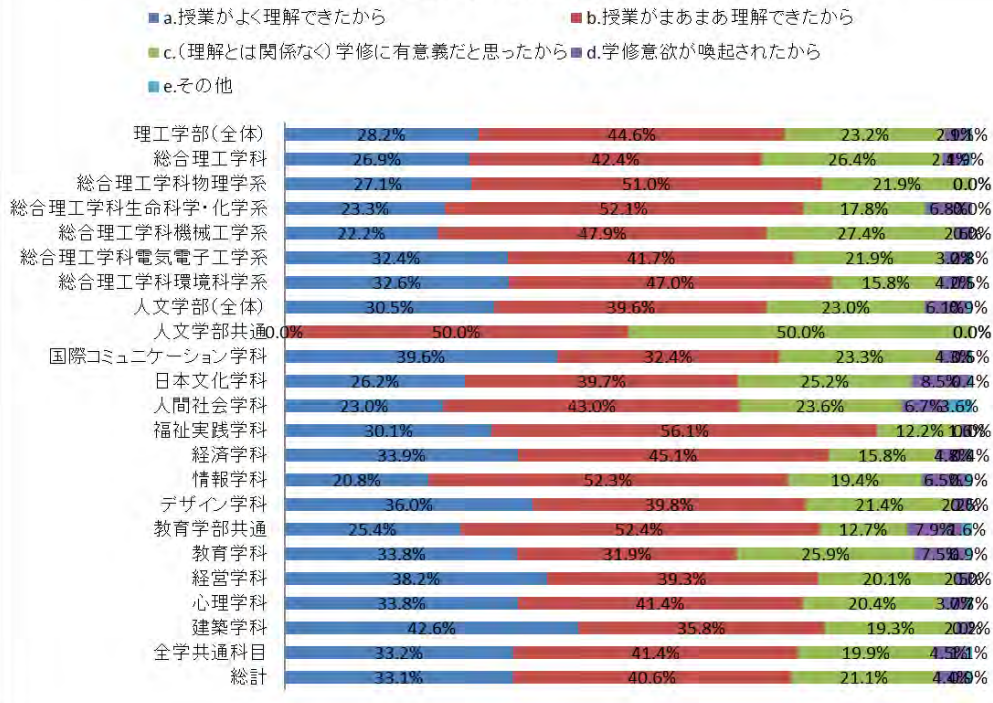


2020年度 学生による授業アンケート結果

設問3. この授業に対するあなたの満足度について教えてください。



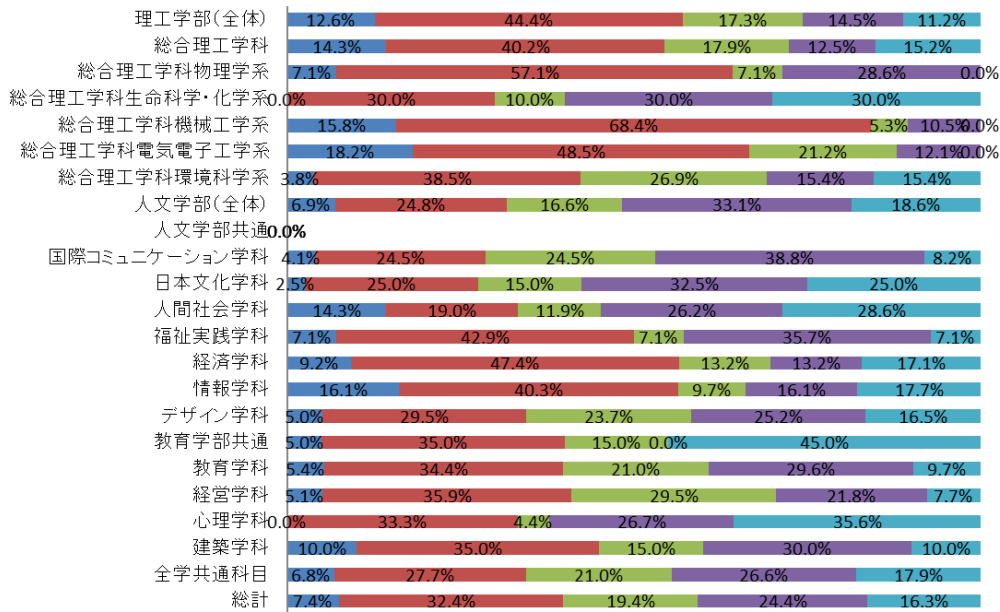
設問4. 『設問3』で『a』あるいは『b』と答えた理由は何ですか？



2020年度 学生による授業アンケート結果

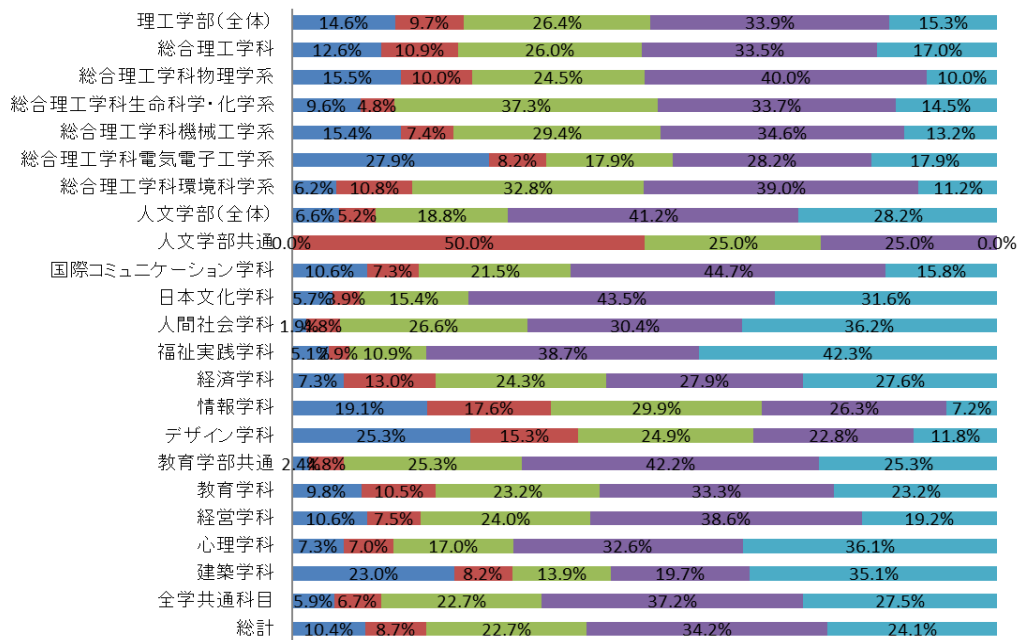
設問5. 『設問3』で『c』『d』あるいは『e』と答えた理由は何ですか？

- a. 授業が全く理解できなかったから
- b. 授業があまり理解できなかったから
- c. 学修に有意義でなかったから
- d. 学修意欲が喚起されなかったから
- e. その他



設問6. あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？

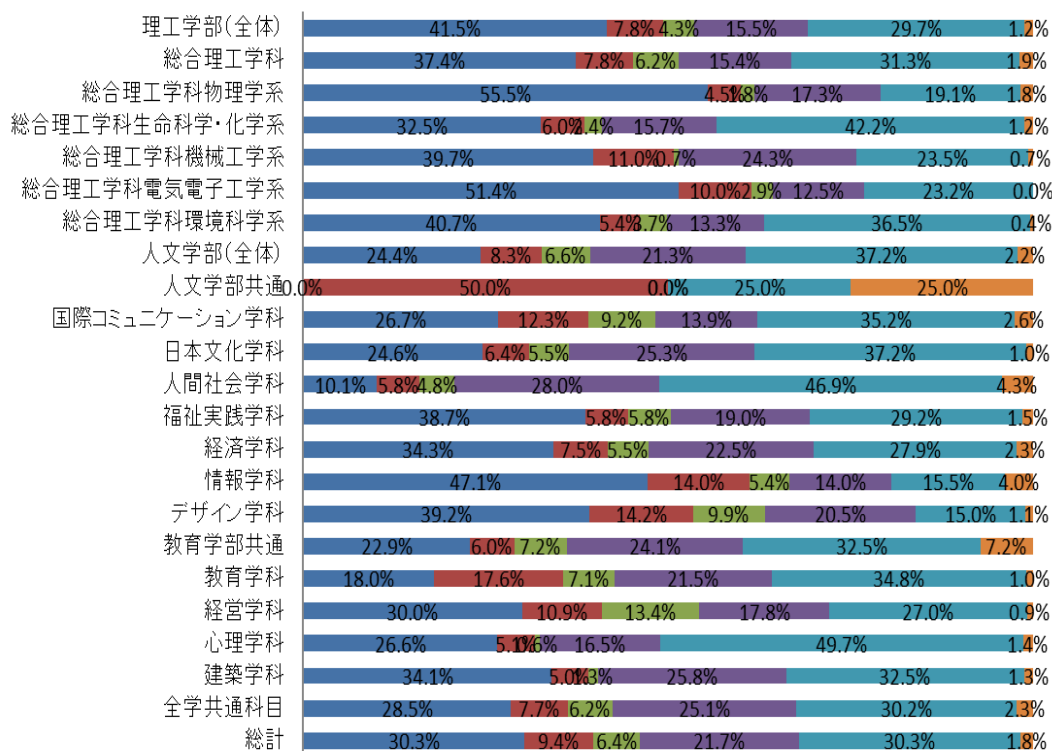
- a. 90分以上
- b. 90分程度
- c. 60分程度
- d. 30分程度
- e. しなかった



2020年度 学生による授業アンケート結果

設問7. あなたはこの授業がよりよいものであるためには、どのような授業であつたらよいと思いますか？

- a. 主に知識や技能・技術を学ぶ授業
- b. (受講生の数に関係なく)自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業
- c. プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業
- d. 知的におもしろいと思える授業
- e. 特に希望はない
- f.その他



2020年度 学生による授業アンケート結果

3. 2020年度 授業アンケート結果の概要

1) 理工学部

- ①学部長による総評

2) 人文学部

- ①学部長による総評
- ②国際コミュニケーション学科
- ③日本文化学科
- ④人間社会学科
- ⑤福祉実践学科

3) 経済学部

- ①学部長による総評
- ②経済学科

4) 情報学部

- ①学部長による総評

5) 教育学部

- ①学部長による総評

6) 経営学部

- ①学部長による総評

7) デザイン学部

- ①学部長による総評

8) 心理学部

- ①学部長による総評

9) 全学共通教育委員会

- ①全学共通教育 委員長による総評

2020年度 学生による授業アンケート結果

1) 理工学部

①理工学部長による総評

授業アンケート回答結果について、理工学部全体の状況について、以下、設問毎に評価する。授業出席（設問1）について、「毎回出席した」が前期86.4%（前年64.2%）、後期84.9%（前年63.1%）となり、大幅に出席状況が改善しオンライン授業のメリットが現れているものと推察される。割合としては全学総計81.1%（後期）と比較し、わずかに高めとなった。授業内容とシラバスの合致（設問2）について、シラバス通り（全く+概ね）は前期80.5%、後期84.0%となった。概ねシラバスに沿って行われたといえる。授業の満足度（設問3）について、満足（大変+まあまあ）は前期86.6%、後期88.6%となり、例年程度であった。多くの学生は概ね授業内容には満足していたと考えられる。オンライン授業に関しても、不満となる点が少なかったことが推察される。その理由（設問4）として、理解できた（よく+まあまあ）について前期76.7%、後期74.2%であった。不満足の原因は、理解できなかったが前期43.1%、後期56.0%であった。不満足（設問3）の割合は低いものの、そのうち理解出来ないと回答した学生が半数となる。上記結果から、全学生の10~15%程度は授業内容の理解が困難であり、各担当教員で個別指導などの対応を行うことが求められる。1回あたりの予習・復習（説明6）について、60分以上行った学生は前期40.3%、後期49.5%となった。理工学部では実験・演習レポートなど課題が多いことが影響していると考えられる。「しなかった」は、ほぼ昨年同等の前期28.7%、後期11.1%となり、自己学習の必要性の啓発を、これまで以上に進める必要がある。前述の授業の理解ができないと回答した学生と同程度の割合といえる。どのような授業が望ましいか（設問7）については、最も多い回答は、技能・技術が前期37.5%、後期39.9%となった。理系の学生の傾向であり、要望に添った教育が概ね実施されているといえる。理工学部独自設問、授業教材（設問9）については、理解できた（よく+まあまあ）は、前期82.5%、後期84.3%となった。概ね教材の質も保たれているといえる。

自由記述については具体個別に様々な意見が書かれており、担当教員のみならず、学系において情報共有し、授業改善を行うことが重要である。また、アンケート回答率が前期29.9%（前年31.8%）、後期20.5%（前年30.0%）と特に後期は例年以上に低く、授業内での実施が困難であったオンライン授業や対面実験科目の集中実施の影響も大きく、各教員の取り組みでも回答率を引き上げるこ

2020年度 学生による授業アンケート結果

とはできなかったといえる。初回授業日およびアンケート期間直前などにアンケートの重要性なども説明することも必要といえる。各科目の更なる質的向上を全教員で目指したい。

(理工学部長 宮脇健太郎)

2020年度 学生による授業アンケート結果

2) 人文学部

①人文学部長による総評

【前提】

「授業アンケート」の全体の回答率が出ていないので正確には分からないが、個々の科目の回答率を見る限り低い。アンケートへの回答がゼロの科目も複数見受けられる。そのため、各学科の主任から提出された総評をもとに学部の総評をまとめるに際しては、あくまでも限られた回答数に基づく総評である点を確認したい。この点は、先の内部質保証検討委員会でも議論されたように改善策が求められる。

2020年度は新型コロナウイルス対応で急遽、遠隔授業が導入されたが、授業アンケートは従来通りの設問項目である。このため遠隔授業への学生の意見は「授業アンケート」の項目に反映されているのか、評価がしにくい(一部の科目では、自由記述の欄に学生が記述している)。状況に応じた授業アンケートが実施されないと、授業改善には結び付かず、単に形骸化されてしまうと思われる。

設問 1. 「授業への出席状況」については、国際コミュニケーション学科、日本文化学科、福祉実践学科で例年より高い傾向にある。これは、遠隔授業が導入されたことと関係があるかもしれない(通学時間がなくなったことで、出席しやすくなった可能性もある)。ただし、オンデマンドやLMSでの授業の場合は、何を持って出席とするのか(アクセス=出席とみなして良いのか)、定義を明確にする必要がある。

設問 2. 「シラバスが守られているか」に関しては、4学科とも学生の8割以上がシラバス通りの授業が出来ていると評価している。ただ、履修登録した学生の人数やバックグラウンド、理解度合い、遠隔授業へのアクセス状況などを鑑みると、当初決めたシラバス通り授業を遂行するよりも、臨機応変にシラバスを修正する方が良いことは留意しておきたい。

設問 3. 「授業満足度」と設問 4. 「授業が満足な理由」は関連づけることができる。遠隔授業であってもインタラクティブなzoomを活用してアクティブ・ラーニングを継続した授業が多い国際コミュニケーション学科では、相対的に授業満足度が高い(「大変満足している」が53.9%で全学で一番高い)。また、日本文化学科をはじめ、4学科がPCを購入し、学生に貸与したことにより学生の学習環境が整ったことが、授業の満足度に反映されていると考えられる。

2020年度 学生による授業アンケート結果

設問3.「授業満足度」と設問5「授業が不満足な理由」も関連づけることができる。総じて、授業の内容をよく理解できないことが、授業に対する満足度を下げている。その原因として、アンケートの自由記述によると、オンライン授業での教員の説明が早い/聞き取りにくい/一方的に話す、資料配布が直前/多すぎる/少なすぎる、学生同士のディスカッションの時間が短い、授業内容と課題とのミスマッチ、などが挙げられている。これらは、個々の教員が対応し、次年度に向けて改善すべき点であると考えられる。

設問6「1回あたりの授業に対して、予習復習をどの程度したか」に関しては、昨年度は、全くしなかった学生が5割を近くいたのに対し、今年度は、人間社会学科をはじめ、その割合が大幅に減少している。コロナ禍で遠隔授業となったことで、より自主的に学ぶ必要が生じたこと、予習復習の課題が明確になったことと関連がある可能性がある。

設問7「授業がより良いものになるためには、どのようなことが必要か。」については、学科によって大きく異なる。学科の特性を反映していると思われる。例えば、国際コミュニケーション学科では、「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」と「プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業」、日本文化学科・人間社会学科では「知的に面白いと思える授業」と「主に知識や技能を学ぶ授業」、福祉実践学科では「a. 主に知識や技能・技術を学ぶ授業」への要望が高い。

(人文学部長 毛利聡子)

2020 年度 学生による授業アンケート結果

②人文学部 国際コミュニケーション学科による総評

授業アンケートに関しては、授業という評価対象だけを独立して分析するだけではなく、学生の授業の受け止め方に影響するアドミッション、カリキュラム、ディプロマの学科の 3 つのポリシーを参照しながら分析する必要があると考え以下のように総評する。

授業の満足度に関しては公表されている 2018 年度と比較しても a と b の肯定的な回答が 85%-90%強 の高い数値でとどまっており、統計的に有意な差はないと思われる。そのため遠隔授業による著しい影響はなかったと考えられる。遠隔授業の中でもよりインタラクティブな ZOOM をフルに活用した授業が影響を最小限にとどめた理由のひとつと考えられる。相対的に満足度は高いのは学科でのプロジェクトベース教育 (PBL) などをはじめとするアクティブラーニングを中心としたカリキュラムポリシーと、プレゼンテーションでの評価を取り入れた選抜で、学習スタイルを考慮に入れて選抜しているアドミッションの方針との適合が理由として挙げられるのではないかと思われる。文部科学省が提示している選抜の方針に沿って、アドミッションとカリキュラムを有機的に結び透けた結果と解釈ができる数値であると言える。また、授業への満足度は、ディプロマポリシーに提示した到達レベル達成への関連が考えられる。入学者の離籍率が相対的に少なく 4 年間で卒業する学生の率の高さ、結果としての就職内定率の高さに結びつく要素であると考えられる。遠隔の影響の少なさは、回答者の自己評価による出席率の高さにも結び付いていると考えられる。しかしながら今後同様の遠隔授業が続いた場合に、この満足度と出席率が保たれるかどうかは、授業アンケートからは読み取ることができない。

遠隔授業の影響は、よい意味で、学生の予習復習の時間に表れている「あなたは 1 回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか？」という設問に対して 2019 年度は前期 39.632.1%、後期 37.035.0%の回答者が全く予習・復習しなかったと回答した。2020 年度は 15.8%と半減している。授業の準備に時間を使わないという過去数年間にわたって見られた傾向が、変化したのは遠隔授業による LMS へのアクセス率の向上により、予習復習の課題が明確になった可能性が考えられる。プロジェクトベースの授業は、特に本学科で海外の学生とのやり取りが含まれ、この時間がはたして「予習復習」という設問の中で反映されているか、疑問が残るところはある。設問 11 にあるようなグループ活動への満足度も高い (a,b が多い)点は、アクティブラーニング中心の授業アプローチによって内容が柔軟かつ動的な授業を行うことができた、という良い評価と考えて良いのではないだろうか。前期終了時に学長からも注意喚起があったよう

2020 年度 学生による授業アンケート結果

に、文献を読んでレポートを提出するというアプローチを取った教員が多い中、学科の教員が柔軟に状況に対応しながらグループ活動をオンラインでも行ったことが理由であると考えられる。

一方で、設問 2 の「この授業の内容はシラバス(授業計画)通りのものでしたか？」という設問に対する回答もまったくシラバス通りの a とおおむねシラバス通りの b ほぼ同じ数値を示していたが、この設問の回答への解釈はより注意深い考察の余地がある。学習者は毎年変化しており、受講生の理解度により、ある程度のシラバスの消化速度は変化すると思われる。授業が静的で固定的な内容を持っていることが必ずしもよいわけではないので、むしろ b が多いことはよい評価であるという解釈も可能ではないだろうか。

2020 年度 学生による授業アンケート結果

③人文学部 日本文化学科による総評

【日本文化学科「2020 年度授業アンケート」結果について・日本文化学科主任見解】

2020 年度は、一年を通し、少数の実習科目を除き、すべてオンライン授業のみで行った。教員は資料を PDF 化してアップロード、録音した講義の Office365 へのアップロード、映像を YouTube にアップロード、などの形で講義内容を伝えようとし、学生との双方向のやりとりに関しては LMS と Zoom の活用を通じてなるべく教室での講義に近い形で発言を促したり、質問に答える機会を確保するように努力した。

このような努力の結果がどれだけ学生の学習機会の供与に役立ったかは教員側から把握しにくかった。

今回のアンケートの結果は、従来の結果と傾向は変わらず、大変良好である。授業内容に満足、まあまあ満足を合わせて 90%程度となっている。前期の 87.1% に対し後期 92.2%と若干よい傾向のように見えるが、回答者の割合が前期 28% に対し後期 21%なので、ポジティブな態度の方が回答を寄せやすいと考えられることから、それほど有意な差ではない。教員が従来の方法では通じない状況の中で、様々な方策を考えてきた成果が前期から出たとみてよい。

4 月に授業を開始するまでに新しく機材をそろえたり PDF を作成したりなど、多くの準備で臨んだが、学生側の機材・受講できる物理的な（部屋などの）環境・インターネット環境が整っていない場合が多々あり、（日本文化学科のアンケートの結果では 15%が PC を持っていない・ネット環境がないなどの困難を抱えていたが、その他一人になれる部屋がない、PC が共有であるなどの不自由を持っている学生を含めると 2 割以上になった）、PDF での資料配布と課題提出など、通信教育なみの授業となってしまうことも多かった。6 月以降は、日本文化学科が購入したパソコンを貸与したり（全部で 34 台）、学生側のネット環境が整うなどの状況の変化を見て、Zoom による授業も増えた。また LMS を通じて学生が相互コメントを行ったり、メールを通じて学生から教員に質問がきて答えることができたりと、情報の提供とフィードバックに関しては満足できるレベルになったのだろう。後期は個別指導コレクションを利用することで利便性と確実性が高まった（メールでは見落としが生じるため）。アンケート結果からはこれらの様々な各教員の努力が実っていることが確認できた。これからも学生との対話、オンラインであっても双方向性のアクティブラーニングの増加などをはじめとする改善を続けていけば、2021 年度の満足度がさらに高まるであろう。

2020年度 学生による授業アンケート結果

学生が考える改善点としては「知的に面白いと思える授業」が30%弱、「主に知識や技能を学ぶ授業」も25%前後であった。「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」や「プレゼンテーションやディスカッションの方法を学ぶ授業」は1割以下の学生しか選択していない。実際にはアクティブラーニングを求めているという結果になっているが、実際は講義中心のものも学生のアクティブな参加を必要しているものも多く提供されているので、改善点としては思い浮かばないのだと考えられる。

毎回出席した学生は80%を超えており、オンラインならではの出席率の高さが浮き彫りとなった。オンラインの数少ない長所の一つといえよう。

昨年度から引き続きシラバスを読んでいない学生が10%程度いたことは問題視されるべきである。今後はガイダンスにおいて周知し、また授業が始まったあとでも、各担当教員がシラバスを読んで授業に臨むように指導する必要がある。ただし、85%程度がシラバス通り、あるいはおおむねシラバス通りと回答していたので、シラバスとの乖離は限定的であるという望ましい状況となっている。

「教室内での学習環境は保たれていましたか」「声の大きさは板書はわかりやすかったですか」という質問には、90%程度が極めて・ある程度当てはまると答えていたところから、学生側の学習環境が（最初はともかく）整ってきたこと、オンラインでの音声配信や資料配信が適切だったことがうかがえる。

学科の偏差値が上昇し続けており、合格者の手続き率も上昇していることから、学生の知的好奇心が高くなっている。オンラインとのハイブリッド授業となる今年度は学生の様子を注意深くみながら、より水準の高い授業を提供する必要が出てきている。

2020年度 学生による授業アンケート結果

④人文学部 人間社会学科による総評

設問1「授業内容の出席状況」については、「1/3以上欠席した」と回答した学生は、前期0.8%、後期0%で、アンケートに回答した学生に限れば、出席状況は良い。前期の回答率は23.6%、後期は9.3%と特に後期は低くなっていることに注意する必要がある。設問3「授業の満足度」では前期87%、後期79.7%が「満足」しており、その理由は前期77.7%、後期66%が「理解できた」からとしている。一方、「満足していない(前期16%、後期10.9%)」者は、前期50.6%、後期33.3%が「理解できなかった」ことを理由に挙げている。このことから、授業が理解できたことが満足度につながっていることが示唆される。設問6「授業の予習・復習」については、「予習・復習をまったくしなかった」割合が、前期32.8% (2019年度58.0%)、後期36.2% (同56.9%)と前年度に比べ20%以上低くなったことが見出される。コロナ禍でほとんどが非対面の授業となり、より自主的に学ぶ必要が生じたり、課題が多く出されるようになったことと関連がある可能性がある。

ここで、「授業に関する学生アンケート」の自由記述から、コロナ禍の影響を見てみたい。コロナ禍におけるオンライン授業の不備や学生側の状況を把握せず一方的に行われた授業に対し、学生たちは不満に感じていること、授業内容の理解に悪影響を及ぼしていること、学習意欲を損ねたこと等が推察される。

授業A「・回を重ねてもZOOMを使ったオンライン授業に慣れないようで、自らのミュートが解除できなくて授業が止まる、ZOOMのリンクをLMSに載せないため授業に参加が出来ない、一度Wi-Fiの不具合などでroomから出てしまうとその後許可されないなどの授業内容以外の問題が多かったため。・思ったより授業内容が難しく理解するのに時間がかかった」

授業B「・課題提出期間が勝手に変更される」「・用語等の説明なしにレポート課題のみを課しとても授業と呼べるものではない」「・学習意欲が喚起されなかったのと、急に習っていない事を題材にレポートをまとめろや解説する資料や動画の添付をしてもらえなかったためとても困りました。やる気が失われました。授業料をこちらは払っているのもう少し生徒目線を考えた授業形態をとってほしい。」

授業C「・出席のカウントをする際に資料を見ないといけない中で授業中は通信が重くzoomを見ながら資料を読むことができなかった。出席が足りなくなっていたと思うと不安に感じているため、授業後も残しておいてほしかった。」

授業D「・zoom上で先生が一方的に90分間話しているだけで、内容があまり入ってこなかった。」

2020年度 学生による授業アンケート結果

授業 E「・今年の期末はどの授業もレポートだとわかっているはずなのに最終週に1週間しか期限がない2000字のレポートを出す意味のわからない授業」

他方、オンライン授業であることに配慮し、教員と学生の双方向ないしは学生間の学びの機会を提供している授業に高評価が得られていた。

授業 E 「時事問題などと絡め他の学生さん達の意見を読めたのは社会学を勉強する上で非常に有意義だったと思いますし、何より楽しく、これまで受講した中で一番満足度の高い授業でした。」

授業 F「・資料に課題の例題などが書いていただいたため大変わかりやすく理解する事ができました。一年では理解ができず単位を取得できなかったのですが2年で理解ができていたため理解した証拠になると思います。コロナやネット回線などの対応にも早急に臨機応変に対応してくださり助かりました。本当にありがとうございました。」

2021年度も引き続きコロナ対応の授業が必要となるため、非常勤講師の先生方も含め、各教員が学生アンケートの結果を把握して対応するべきであると思われる。

しかし希望は「・対面授業の再開を希望します」

こんな希望が出ている。「・テキストベースだけでなく動画配信や ZOOM と合わせた授業がよいのではないかと思う。」大内先生

「授業内でディスカッションを行いたい。」という声アリ。

関根 多文化社会論

統計学の基礎 齊藤先生

授業 C「・途中から zoom を用いた講義形式になったが、その際に事前連絡無く、開始直前にいきなり ID・パスワードを送られてきた（多くの学生は zoom 形式初回授業を受けれてないにも関わらず zoom レコーディングの動画や講義の資料も公開されず）」

・期末レポート作成に関しても講義の内容を踏まえて自分の考えを書くものであったが、LMS 上の資料が公開されておらず対応が難しかった。」

後期は改善か

授業 B「・今回は慣れないオンラインという形での講義にも関わらず連絡用のメールアドレスをシラバスに記載していないため必要な時に連絡が取れない。」

期末レポートを再提出を許可しないと設定されているため間違えて提出してしまったのに取り消せなくなりその相談をすることも連絡方法がないため相談をすることもできない。頑張っ授業を受け、レポートを作成したのにも関わら

2020年度 学生による授業アンケート結果

ず押し間違えで単位がもらえなくなるのは我慢ならないから。」

学生 D「・内容自体にはとても満足だったが、オンライン授業であったため本来の学びが制限されているように感じた。」

「・他の講義と比較して明らかにレジュメなどの量が多く、正直学習をするうえでとても苦痛だった。・文章ばかりで刺激がない。・スライドの量が多く、内容理解が追いつかない場面が多々あった。中間レポート提出時には期限が短かったためとても焦った。そのため、短くとも2週間は欲しい。」

→対応策の希望「・ZOOM を使った授業が困難な場合は配布資料を分かりやすく作成しそれを公開、閲覧後に課題提出をするという形態でよいと思います。」

「・zoom で使うパワポと公開しているパワポに差をつけていて zoom の方ではリアルタイムなので lms のものより良いものを作っていると言われてインターネットの不具合や各家庭での環境に差があるのにひどいと感じたから。また、公開期間が異常に短い点も不満であり、こちらはお金を払っているのに教える気があるのかと思ったから。」

「・先生が一方的に話す。生徒に関心があるとは到底思えません。配布資料や授業内容を見ても授業が薄い。課題など説明不足もあり対応も遅ければ、回線やコロナ禍という中での事情も理解されず散々。必修じゃなかったら私は絶対を選びません。授業料もつたいない感じました。社会人であるのに仕事も全うできないのかと感じました。授業形態、配布資料など全て変えるべき。生徒に関心を持つ。それが教える立場の人間でお金を貰っている人間だと思えます。」 下平先生

これに対してどうしたらいいか「・授業形態がとても単純。

資料を配り、先生が一方的に話して課題を出す。捻りのあるような内容、もしくは授業形態にするべき。先生側に問題が生じたら笑ったりして「ごめんね」で、生徒側に問題があれば理由を真剣に聞かずに怒鳴ったり、冷たくあしらわれる。お金を払っているのはこちらで受け取っているのはそちらだ。しっかりとした態度で臨んでいるのでその態度や対応を改めるべき。とても不愉快でした。社会に出てちゃんと対応や態度をするのは当たり前です。生徒に関心を持ち対応するべきだ。苦しかった」

2020年度 学生による授業アンケート結果

⑤人文学部 福祉実践学科による総評

設問 1. 「授業への出席状況」「授業の出席状況」については、前期・後期とも100%の回答者が、「毎回出席した」または「2/3 より多く出席した」と回答している。これは、例年度より高い傾向にある。本学科の人数が比較的少人数であること、また教員がリアクションペーパーなどの活用を行っているためと考えられる。さらに昨年度は、ZOOM や LMS を活用したことも影響しているかもしれない。

設問 2. 「シラバスが守られているか」に関しては、「まったくシラバス通り」「おおむねシラバス通り」を合計すると前期 80.4%、後期 87.6%と8割以上がシラバス通りの授業ができていると学生が評価している。一方で、「シラバスを読んでいるので判断できない」と回答した学生が前期 12.3%、後期 10.2%いる。

設問 3. 「授業満足度」は、前期 89.1%、後期 89.8%の回答者が授業内容に対して「大変満足している」または「まあまあ満足している」と答えている。設問 4. 「授業が満足な理由」としては、「授業の内容の理解」については、「よく理解できた」「まあまあ理解できた」を合わせて、前期が 78.9%、後期 86.2%である。一方、「満足していない（前期 6.5%、後期 4.3%）」と回答した者では、設問 5 「満足していない」「どちらともいえない」の理由として、前期 40.0%、後期 50.0%が「授業が理解できなかった」こと、前期 26.7%、後期 35.7%が「学修意欲が喚起されなかったから」をあげている。

設問 6 「1回あたりの授業に対して、予習復習をどの程度したか」は、「しなかった」が前期 44.9%、後期 42.3%となっているが、前年度の5割以上に比較すると、減少している。

設問 7 「授業がより良いものになるためには、どのようなことが必要か。」という問いに対しては、「a.主に知識や技能・技術を学ぶ授業が前期 34.1%、後期 38.7%、「d. 知的におもしろいと思える授業」が前期 19.6%、後期 19.0%となっている。一方で、「e. 特に希望はない」と回答したものが、前期 30.4%、後期 29.2%となっている。これは、すでに満足のいく授業がなされているため希望がないと回答したとも考えられるが、さらなる検討が必要である。

2020年度は対面講義が大幅に制限され、例年とは異なる講義スタイルをとることになった。そのことへの学生のマイナスの影響が心配されたが、講義全体への満足度が向上傾向にあった。また、「予習復習時間」を「しなかった」と回答した学生が前年度5割以上に対して、4割とやや減少傾向にある。ZOOM や

2020年度 学生による授業アンケート結果

LMS の活用により、毎年一定程度いる対面講義が苦手な学生が講義に参加しやすくなったこと、ネット上の資料にアクセスするようになったことが推測される。今後の講義や学生への指導方法を検討していく必要があると考える。

(学科主任 山井理恵)

以上

2020年度 学生による授業アンケート結果

3) 経済学部

①経済学部長による総評

アンケート回答数は例年に増して少なかった。

経済学科の場合、他学科と比較しても回答率は際立って低い(とくに後期)。「標本」と「母集団」との関係から、回答結果をもって全体に対して何かを推論し一般化するという前提が崩れる危険性があるが、かかる限界を前提した上で、以下、若干のコメントを記す。

前期と比較すると、総じて後期の方が教育効果として改善が伺える回答割合が多くなっている。例えば、授業はシラバス通りに行われたかという質問に対し、前期は「完全に」「おおむね」を合わせて84.7%、後期のそれは92.0%であった。授業満足度も同様に、「満足」「まあまあ満足」の割合が前期は80.6%、後期のそれは86.8%と良い方向に改善している。オンライン接続の問題も同様で、前期は約2割の学生がアクセスの集中による接続困難に見舞われることが多かったが、後期のそれは12.4%に減少している。

ただし、上記のような数値の改善は、後期の回答割合が前期の約3割(回答者数577名)にまで減少していることに照らすと、授業に対する満足度が高い学生がより多く回答していた結果であるとみることもできる。

なお、回答数以外では、他学科との有意な差は見出せなかった。

ともあれ、毎年指摘していることではあるが、アンケートの回答率をどう高めていくかが、依然として大きな課題として残る。

(経済学部長 坂本 秀夫)

2020年度 学生による授業アンケート結果

4) 情報学部

①情報学部長による総評

今年度は、本学の「新型コロナウイルス感染拡大の対応に関する基本方針」に則り、ほぼすべての授業が非対面（対面式授業以外）での実施となった。学生のアンケートへの回答期間は例年よりも一か月ほど長く設けられたが、回答数(回答率)は前期 781(25.3%)、後期 278(8.8%)となっており、十分とは言い難い回答数であった。

設問1「授業への出席状況」については、昨年度とほぼ同様な傾向であった。2/3以上出席した学生は前期 99.6%、後期 99.0%であり、アンケートに回答した学生に限れば、非対面授業でも良好な出席状況となっている。特に、「毎回出席した」との回答が前期では 77.3%、後期では 83.5%となっており、昨年度と比較して前期は 12.7 ポイント、後期では 22.1 ポイント改善されている。非対面での授業は通学することなく自宅で受講できるなどの理由から、出席率の改善につながったのではないかと推測される。

設問2「授業内容とシラバスの整合性」については、昨年度と同様に概ね相違なかったという回答であったと見て取れる。後期については、昨年度より 4.5 ポイント改善された。「シラバスを読んでいない」との回答は、前期は昨年度より 4.4 ポイント改善されて 5.0%となった。しかし、後期は 10.8%となっており、改善すべき点であると考えられる。

設問3「授業の満足度」については、「大変満足」「まあまあ満足」とする評価を合わせた割合は、すべての授業が対面で実施された昨年度と比較して前期は 8.8 ポイント、後期は 10.3 ポイント改善された。しかし、大学全体と比べて低い結果となっており、ほぼすべての授業が非対面で実施されたことで大学の設備が全く利用できなかったことなども影響しているのではないかと推測されるが、授業改善に向けたさらなる努力が必要である。

設問4「授業満足度が高い理由」については、授業の理解度が満足度に大きく作用していることがわかる。「学修意欲が喚起されたから」を理由とする割合は、前期 3.3%、後期 6.5%と依然として低く、授業改善に当たって留意すべき点となっている。

設問5「授業満足度が低い理由」については、授業の理解度を理由とする割合が前期は昨年度とほぼ同程度であったが、後期は昨年度に比べて 9.0 ポイント増加した。学修の意味や学修意欲を授業満足度が低い理由とする割合は昨年度と比べて減少したが、「その他」を理由とする割合が前期 6.6 ポイント、後期 11.5

2020年度 学生による授業アンケート結果

ポイント増加した。非対面での授業の受講環境に対する配慮などが、授業の満足度に影響しているのではないかと推測される。

設問6「授業の予習・復習」については、「90分以上」「90分程度」を合わせて前期23.9%、後期36.7%となっており、昨年度と比べて前期14.8ポイント、後期20.4ポイント改善された。「しなかった」との回答は、前期は昨年度より19.3ポイント改善されて24.1%、後期は21.0ポイント改善されて7.2%となった。学生が授業の予習・復習に充てる時間は、すべての授業が対面で行われた昨年度と比べて増加していることがわかる。

設問7「よりよい授業形態」では、「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」「知的に面白いと思える授業」を合わせて前期44.3%、後期61.1%となっているのに対して、「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」は前期10.0%、後期14.0%となっており、昨年度と同様な傾向であった。この結果が、従来の受動的な授業形態を情報学部の半数程度の学生が望んでいるのに対して、主体的に課題解決を考える能動的な授業形態を望んでいる学生は一割程度であることを示唆するものであれば、授業の改善に取り組んではいるが、依然として学生の学修に対する姿勢を変えるまでには至っていないようである。

今年度はコロナ禍の影響により、対面授業の代替として、遠隔会議システムZoomを利用した同時双方向型の授業や、学習管理システム(LMS: Learning Management System)を利用したコンテンツの配信によるオンデマンド型の授業が実施されたが、授業への出席状況や満足度が改善され、授業の予習・復習に充てる時間が増加した。しかし、アンケートの回答率が低いことから、非対面での授業に関する更なる調査が必要であろう。

対面・非対面それぞれの授業形態の特徴を踏まえて、学修の意味付けがより明確になるとともに、学生の学修意欲を高められるような新しい授業形態を模索していきたい。

2020年度 学生による授業アンケート結果

5) 教育学部

①教育学部長による総評

アンケート結果の概要は次の通りである。

(1) アンケートの回答率が低い(前期 28.6%、後期 12.3%)。

(2) 回答した学生のほとんどが授業に毎回出席している。

(3) 75%ほどの授業においてシラバス通りに展開されているが、大学全体と比較するとやや低い。

(4) 80%以上の学生が授業に満足している。

(5) 満足の主要因は「授業が理解できたから」である。

(6) 「受講した授業がよりよいものであるために」の質問に対し、他学科と同様に「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」「知的におもしろいと思える授業」を希望する回答率が高かったが、教育学科では「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」を希望する回答率が他学科と比べて高かったのが特徴的である。

以上の結果から「シラバス通りで知識や技能・技術が理解しやすく学べる授業」に学生は満足していると捉えて良いのだろうか。20%程度の回答率でこのように考えることは危険である。回答しなかった学生は、「シラバス通りで理解しやすい授業」では語り尽くせない授業を大学に求めていると考えるのは飛躍しすぎであろうか。

昨今、“アクティブラーニング”が推奨されている。教育学部の多くの授業では“アクティブラーニング”の語に関係なく、受講生と教員間でコミュニケーションを図りながら「主体的・対話的で深い学び」を実践している。アクティブラーニング型授業では進め方によりシラバス通りに展開しないことも起こりうるが、『授業の展開によりシラバスが変化する「自ら考えることで課題解決の方法を学ぶ授業」』も、学生にとって意義のある授業となり得るのではないだろうか。

今後、学生とコミュニケーションを図りながら、多様な教員による多様な授業の学生への提供に繋がるようなアンケートの構築が必要と考える。

(教育学部長 篠山浩文)

2020年度 学生による授業アンケート結果

6) 経営学部

①経営学部長による総評

各質問に関するコメントを示す。

〔1：この授業へのあなたの出席状況について教えてください。〕という設問に関しては、「毎回出席した」と「2／3より多く出席した」の合計が、前期では100%、後期は99.7%と前期、後期ともにほぼ100%に近い学生が高い出席率となっており、授業に対する熱心な態度を示している。

〔2：この授業の内容はシラバス（授業計画）通りのものでしたか?〕という設問に関しては、前期91.1%、後期90.8%が「全くシラバス通りだった」、「おおむねシラバス通りだった」と回答しており、教員の授業はほぼ計画通りに進められたと評価されている。

〔3. この授業に対するあなたの満足度について教えてください。〕という設問に関しては、「大変満足している」、「まあまあ満足している」が前期90.4%、後期89.9%と、高い満足度を得ており、教員の授業については高い評価を得ている。

「4.『設問3』でその満足度の理由」を問うと「授業がよく理解できたから」、「授業がまあまあ理解できたから」が前期82.7%、後期が77.5%と回答しており、教員の講義の平易さが評価されているようである。

〔5.『設問3』で「授業が満足できなかった学生の理由」は、前期では39.1%、後期が35.9%と「授業があまり理解できなかったから」と答えた学生が多かった。学生の理解力を高める工夫が今後の課題と思われる。

「6.あなたは1回あたりの授業に対して、予習・復習をどの程度しましたか?」の質問に対しては、前期は90分以上が8.2%、90分程度が7.5%、60分程度が19.5%で、60分以上が計35.2%であったものが、後期では90分以上が10.6%、90分程度が7.5%、60分程度が24.0%と計42.1%に増えており、大きく改善されていることがわかった。

「7.あなたはこの授業がより良いものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか?」の質問に対しては前期後期ともに1位は「おもに知

2020年度 学生による授業アンケート結果

識や技能・技術を学ぶ授業」であり、前期 34.6%、後期 30.0%だった。以下 2 位も前期、後期ともに「知的に面白いと思える授業」が前期 17.2%、後期 17.8% で、これら 2 つが学生の興味関心を引く授業であることがわかった。

当初リモートによる非対面の授業による影響が心配されたが、総合的にみると学生の授業に対する満足度や理解度は高いものが示され、授業へ臨む態度も改善されつつある。学問への興味関心の度合いも大きなものが見られ、良好な学習効果が現われていることがアンケートの結果から判断できた。

(経営学部長 若木宏一)

2020年度 学生による授業アンケート結果

7) デザイン学部

① デザイン学部長による総評

出席状況について、「全出席」の割合は前期 80.0%、後期 73.4%であり、ともに全学平均よりも若干低い。また、授業への出席率は前期よりも後期の方が低く、昨年度も同様の傾向が見られる。2020年度は、ほぼ全ての授業がリモートで実施されたが、異なる授業実施形態でも後期の出席率が低いことについては、今後改善に向けた取り組みを検討する必要性を感じている。

シラバス（授業計画）については、「全くシラバス通りであった」「おおむねシラバス通りであった」を合わせて、前期 84.6%、後期 90.2%であり、全学平均と比べても高い割合を示している。「シラバスを読んでいない」と回答した学生の割合も、全学平均よりも低い。これは、シラバスを授業初回の配布資料の一つとして、活用している結果と考えられ、コロナ禍における授業運営上も、授業計画、科目の教育目標への理解を深めるための、有効な活用方法と言える。

授業に対する満足度については、「大変満足している」「まあまあ満足している」を合わせると、前期 90.0%、後期 88.9%となり、全学平均と比べても高い結果となっている。学科 FD を実施し、恒常的に授業改善のための検討を行った結果であり、今後も継続していきたい。

予習・復習の時間については、「90分以上」「90分程度」を合わせて、前期 28.6%、後期 40.6%で、全学平均よりも高い。実技系科目ですでに反転授業を取り入れていた経緯もあり、リモート授業においても予習・復習は学生各自が PC を持ち、自宅学習環境が整っていることで実現できていると言える。

昨年同様に授業アンケートの結果は総体的に良好であると思われる。次年度についても授業改善の更なる強化を目指したいと考える。

(デザイン学部長 塩野麻理)

2020 年度 学生による授業アンケート結果

8) 心理学部

①心理学部長による総評

心理学部心理学科

2020 授業アンケートの結果についてのコメント

心理学部長 石井雄吉

1. 2019 年度と比較して

【設問 1 について】

前期：「毎回出席」の割合は、2019 年度の 68.6%に比して、2020 年度は 94.2%と 25 ポイント余りも高くなっている。これは多くの授業がオンデマンドのオンラインで行われた結果と言える（一部に Zoom などによるオンタイムの授業も開講されていたが、ネット環境を配慮して、録画によりオンデマンドの視聴も可能であった）。ただし、学生の授業コンテンツへのアクセス状況を見ると、深夜の視聴も珍しくはなかった。つまり、オンデマンドのオンライン授業によって、昼間型の生活リズムが崩れていた学生も少なくないということである（保護者からの相談もあった）。

後期：「毎回出席」の割合は、後期になると、2019 年度の 66.9%に比して、2020 年度は 84.7%と 17 ポイント余りも高くなっている。ただし、2019 年度の前期・後期間では大差なかったものが、2020 年度は前期に比して 9.5 ポイントも低下している。これは前期に見られていた昼夜逆転などの授業に向かう態度の緩みが、後期でより顕著となった可能性を示唆している。

ただし、このアンケートは対面授業を前提としているので、オンラインの場合、「何をもって毎回参加」というのかの定義が曖昧である。

【設問 2 について】

前期：「シラバス通り」「おおむね通り」の割合は、2019 年度の 86.1%に比して、2020 年度は 80.6%と 5.5 ポイント低下している。これは、教員が対面授業から非対面授業への切り替えを行う時間的余裕が十分ではなかった、あるいは、非対面向けの授業は準備したがシラバスの変更まで手が及ばなかったことを物語る数値かも知れない。これは必修科目や資格科目といった「休講できなかった」準備期間不足の科目が主な対象である。しかし、いずれにせよ、学生から見れば、

2020年度 学生による授業アンケート結果

このギャップは「シラバスと異なった授業を受けた」という印象が強かった結果である。

後期：「シラバス通り」「おおむね通り」の割合は、2019年度の85.8%に比して、2020年度は87.4%と1.6ポイント向上している。教員も、時間的な余裕を得られたので、シラバスの修正も含めてオンライン授業に慣れたはずだが、それは数値にわずかし反映されていない。ただし、後期のアンケート回答率は20%と前期の40.6%に比して20ポイント以上低下しているため、この数値の信頼性はやや慎重に受けとめた方がよい。

【設問3について】

前期：「大変に満足」「まあまあ満足」の割合は、2019年度の88.9%に比して、2020年度は81.4%と7.5ポイント低下している。対面授業における満足度とオンライン授業における満足度とを同じ尺度で測定することの妥当性には疑問も生じるが、対面を前提としていた授業内容を、急遽、非対面に変更して行ったわけであるから、この低下は致し方ないかも知れない。

後期：「大変に満足」「まあまあ満足」の割合は、2019年度の88.7%に比して、2020年度は92.9%と4.2ポイント向上している。後期になって、教員もオンライン授業にいくらか離れてきた結果かもしれないが、やはり、アンケートの回答率の低さを見ると、そう楽観視はできない。

【設問4について】

前期：「よく理解」「まあまあ理解」の理由は、2019年度も2020年度も、b「まあまあ理解」が1位で、「よく理解」が2位であった。この結果から、学生にとって、授業のわかりやすさが満足度の主要な要因となっていると考えられる。したがって、この結果は、教員が学生の予習や自主的な学びを前提とした授業を行うと、満足度が低下する可能性を示唆していると言える。

後期：「よく理解」「まあまあ理解」の理由は、前期と同様に、2019年度も2020年度も、b「まあまあ理解」が1位で、「よく理解」が2位であった。ただし、2020年度の「よく理解」は前期が23.2%であったことに比して、後期は33.8%と10.6ポイントも高くなっている。これはオンライン授業にとって、教員側からの一方向的な授業のわかりやすさがより重要であることを示唆している。さらに、深読みすれば、そういったわかりやすい授業が少なかったが故に、わかりやすかった(丁寧な解説の)授業が学生にとって強く印象に残った可能性もある。

【設問5について】

前期：「あまり・まったく満足していない」「どちらとも言えない」の理由は、

2020年度 学生による授業アンケート結果

2019年度が「あまり理解できなかった」が1位であったことに比して、2020年度は「その他」が1位となり、「あまり理解できなかった」は僅差で2位となった。この「その他」は2019年度でみると、5選択肢中4位であった。設問4の満足度に関しては「わかりやすさ」が重要な要因と考えられたが、自由記述を見ると、オンライン授業における不満足の原因は、ネット環境やデバイスに応じた教材の問題も大きいことが窺える。

後期：「あまり・まったく満足していない」「どちらとも言えない」の理由は、前期の結果と同様に、2019年度が「あまり理解できなかった」が1位であったことに比して、2020年度は「その他」が1位となり、「あまり理解できなかった」は僅差で2位となった。やはり、教員の授業技術の域を超えた課題が窺える結果である。

【設問6について】

前期：「予習」は、2019年度も2020年度も、e「しなかった」が1位で、d「30分程度」が2位であった。したがって、予習に関して、オンライン授業は特にマイナス要因となっているわけではなく、元々、授業形態に関係なく予習不足傾向があると言える。

後期：「予習」は、前期と同様に、2019年度も2020年度も、e「しなかった」が1位で、d「30分程度」が2位であった。学生の満足度にとって「わかりやすさ」が重要な要因となっていることの一因として、学生自身の自主的な学習不足があり、したがって、教員には学生の自主的な学びを喚起するような介入が求められる。

【設問7について】

前期：「授業がよりよいものであるため」は、2019年度も2020年度も、e「特に希望はない」が1位で、a「知識・技能・技術」が2位であった。これを見ると、学生の多くは学びに対して受け身的であり積極的に求めるものは、学問の理論や思想よりも具体的な「How to」であると言える。確かに、DPも「・・・ができる」と謳っているわけだから、その「できる」がつつい具体的な手技や技術と結びつくのは無理もない。

後期：「よりよい授業」は、前期と同様に、2019年度も2020年度も、e「特に希望はない」が1位で、a「知識・技能・技術」が2位であった。

2019年度・2020年度学部内比較についての総括

通常の対面授業であった2019年度とほぼすべてがオンライン授業であった2020年度とを比較してみたところ、授業への出席率は2020年度の方が高いとい

2020 年度 学生による授業アンケート結果

う結果であったが、オンデマンド方式が主であったため、昼夜逆転といった学生の生活リズムの崩れが窺われた。実際に学生へ聞いてみると、授業時間にアルバイトを行っている事例もみられた。これに対しては、オンライン授業であっても、Zoom などによるオンタイム授業を行うことで対処する必要があるだろう。

関連して、学生からの質問も時間割とは関係なく、任意の時間に LMS の個別指導コレクションなどを介して行われるため、タイムリーな回答ができず、それが学生の不満の要因にもなっている。一方で、この時間外の質問については、特に、非常勤講師の負担が大きい。

シラバスに関しては、2020 年度の場合、やはり、対面を前提とした内容を、急遽、オンラインに変更した結果、実際の授業内容とで齟齬が生じている。特に、心理学部の場合、実験、実習はまったく実施できていないが、これは当学部だけではなく、全国的な現象であり、例えば看護の場合、臨床実習経験のない看護師が医療現場に出て行く事態となっている。しかし、これは担当教員に帰すべき問題ではないので、やはり、対面授業向けのアンケートをオンライン授業に当てはめることには無理があった。

それでも、前期に比して後期の授業では、教員がシラバスの修正を行ったり、オンライン授業技術の習熟度を高めたことにより、シラバスと授業内容との齟齬は軽減して、2019 年度並みの評価となっている。

学生の満足度は、対面・オンラインにかかわらず、「わかりやすさ」が重要な要因であった。ただ、この点は、学生側の予習不足とも関連していると考えられる。つまり、予習していないから授業だけで理解できるかどうかは授業評価のポイントになってしまっているわけである。教員側としては、学生に予習を促すような授業が求められる。

授業の満足度が低かった理由として、2020 年度は「その他」の多さが特徴的であった。やはり、オンライン授業となると、対面と異なって、資料の工夫などの授業教材の要因も満足度に大きく関わっていると言える。ただし、自由記述を見ると、実験や実習といった体験型の授業を行えなかったことによる不満も散見されるが、既述のように、これは担当教員個人に帰する問題とは言えないので、このような不満は、対面授業用のアンケートをオンライン授業で用いたことによる混乱を物語っている。

2. 2020 年度の全学平均と比較して

【設問 1 について】

前期：「毎回出席」の割合は、全学平均の 83.1% に比して、94.2%（全学で 1 位）と、11.1 ポイント高くなっている。授業への取り組み意識は、他学科に比して高いと言える。

2020年度 学生による授業アンケート結果

後期：「毎回出席」の割合は、全学平均の81.1%に比して、84.7%と3.6ポイント高いが、前期よりも9.5ポイントの低下となっており、順位も7位に下がっている。

この結果は前期でみられた授業への取り組み意識の高さが減退していることを示唆している。オンライン授業の成績評価にあたっては、「オンライン授業を配慮する」という大学の方針であったことから、後期における授業態度の緩みは、“オンライン授業慣れ”現象を物語っているかと思われる。

ただし、前年度との学部内比較でも触れたように、オンライン授業の場合、何をもって「出席」とするのかという定義が曖昧である。

【設問2について】

前期：「シラバス通り」「おおむね通り」の割合は、全学平均の81.4%に比して、80.6%と、ほぼ同程度であった。

後期：「シラバス通り」「おおむね通り」の割合は、全学平均の85.2%に比して、87.4%と、2.2ポイント高くなっているが、ほぼ同程度と言える。

前期に比して、このポイントは向上傾向を示しているが、この変化は全学的に、後期になってオンライン授業への体制が整ってきていることを示している。

【設問3について】

前期：「大変に満足」「まあまあ満足」の割合は、全学平均の84.8%に比して、81.3%と3.5ポイント低くなっている。

後期：前期：「大変に満足」「まあまあ満足」の割合は、全学平均の87.3%に比して、92.9%と5.6ポイント高くなっている。

心理学部の場合、前期の経験から、後期の授業がオンラインに適した方向で準備が整った結果であろう。具体的には、前期がPDFの配信を中心にしてきた教員も、後期にはナレーション付きパワーポイントを導入したりといった工夫が見られている。

【設問4について】

前期：「大変満足」「まあまあ満足」の理由は、全学平均でb「まあまあ理解」が1位、「よく理解」が2位であったことに比して、心理学部ではb「まあまあ理解」が1位、「有意義」が2位であり、「よく理解」は僅差で3位であった。

心理学部の「有意義」の割合は、全学的に見ると、日本文化学科、情報学科に次いで3位である。「理解とは関係なく学修に有意義」とは具体的にどのようなことを指すのであろうか。設問の意図や学生の受け取り方を確認する必要がある。

2020年度 学生による授業アンケート結果

後期：「たいへん満足」「まあまあ満足」の理由は、全学平均も心理学部も同じく b「まあまあ理解」が1位で、「よく理解」が2位であった。

前期・後期を通して、授業の満足度は「わかりやすさ」が主要な要因となっていることが明らかである。ただし、個人的な経験であるが、他の授業で学習済みの内容について、学習済みとしてその解説を省略すると、「わかりやすすくない」授業になってしまうので、系統的な学習の効果について検討が必要であろう。

【設問5について】

前期：「あまり・まったく満足していない」「どちらとも言えない」の理由は、全学平均で b「授業があまり理解でいなかった」が1位、d「学修意欲が喚起されなかった」が2位であったことに比して、心理学部の1位は全学と同じく「b「授業があまり理解でいなかった」であったが、2位は e「その他」であった。また、2位と僅差で「全く理解できなかった」が3位となっている。心理学部でこの c. d. e. の回答数は 168名/898名 (18.7%) であったが、「どちらでもない」の23名を除くと 145名/898名 (16.1%) が、授業の内容を理解できていないことになる。

ただし、この結果と実際の成績との関連、あるいは、出席状況との関連は不明であるので、その点をリンクさせた集計ができるとより有益なデータとなろう。さらに、e「その他」については自由記述の内容を見ると、教員一人一人の課題が浮き彫りになっているので、各教員がこの結果を真摯に受けとめて改善すべき点は改善し、あるいは、改善の必要がないもの（教育目標上不可欠な内容）であればその説明責任を果たす必要があると言える。

後期：「あまり・まったく満足していない」「どちらとも言えない」の理由は、b「あまり理解できなかった」が1位、d「学修意欲が喚起されなかった」が2位であったことに比して、心理学部の1位は e「その他」、2位は「あまり理解でいなかった」であり、d「学修意欲が喚起されなかった」は3位 (12名/642名：1.2%) であった。

この結果から、全学的にも、心理学部も、「学修意欲が喚起されにくい」一群の学生が存在していると言えるので、彼らについて、入学前後で、目的意識を高める教育も必要であると言える。心理学部では、オープンキャンパスを「入学間教育」の一環として位置づけているが、これをさらに拡充する必要があると言える。

また、既述のように、心理学部では全学に比して「その他」が多いことも特徴であるが、具体的には教員一人一人の課題、あるいは、教材がオンラインに適していたかどうかといった問題が指摘されている。

2020年度 学生による授業アンケート結果

【設問6について】

前期：「予習」は、全学平均でd「30分程度」が1位、e「しなかった」が2位であったことに比して、心理学部はe「しなかった」が1位、d「30分程度」が2位で全学と逆の順位となっている。

後期：「予習」は、全学平均も心理学部も前期と同じ傾向を示しているが、心理学部ではe「しなかった」が前期の29.1%から36.1%と7ポイントも増加している。やはり、オンライン授業による授業態度の緩みが強まった結果かも知れない。

【設問7について】

前期：「授業がよりよいものであるため」は、全学平均も心理学部も共に、e「特に希望はない」が1位、a「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」が2位であった。ただし、全学に比して、心理学部の場合、1位のe「特に希望はない」が37.9%（全学は：30.6%）に比して、2位のa「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」は31.3%（全学：28.8%）と、5.7ポイントも低くなっている。

既述のように、学生にとっての主要な関心は、やはり、知識やSkillsということであるが、受け身的な学生も多いと言える。

後期：「授業がよりよいものであるため」は、全学平均も心理学部も共に、e「特に希望はない」が1位、a「主に知識や技能・技術を学ぶ授業」が2位であった。ただし、心理学部の場合、1位のe「特に希望はない」は前期の37.9%に比して、後期は49.7%と、11.8ポイントも増加している。

これを心理学部の授業が優れているからと脳天気・短絡的に受け取ることは慎むべきであり、学生の向学心を高めるような授業内容の工夫が求められていると受け取る必要がある。

2020年度の全学平均と比較についての総括

心理学部の結果は概ね大学全体の傾向と同様であったが、特に心理学部では、前期に比して後期でポイントがマイナス方向に高まる傾向が見られた。ただし、心理学部における授業満足度の低い要因として、「その他」の割合が高いという特徴が見られる。具体的な内容を見ると、教員一人一人の課題、あるいは、オンライン授業に適した教材ではなかったことなどが上げられている。

また、心理学部の場合は、大きな課題として予習不足を指摘できる。2020年度は、ほぼ全面的にオンライン授業であったため、例年に比していっそう予習不足に陥りやすかったという考察もあり得るが、残念ながら、心理学部のこの傾向は2019年度も同様であった。授業をよりよくするための提案も「特に希望はない」が1位となっていることから、心理学部の学生に対しては自発的な学び

2020 年度 学生による授業アンケート結果

や向学心を育成する必要があると考えられる。

3. 回答率について

2020 年度前期の回答率は、全学平均で 29.1%、心理学部で 40.6%であった。後期の回答率は全学平均で 18%、心理学部で 20%であった。それぞれ 11.1 ポイント、20.6 ポイントの低下であった。したがって、特に後期のアンケートは 5 人に 1 名程度の回答に終わっており、この結果をもって授業内容に対して断定的な結論を導くことは危険である。

2019 年度と比較してみると、回答率は、全学平均で 33.9%、心理学部で 50.2%であった。後期の回答率は全学平均で 27.9%、心理学部で 55.0%であり、特に心理学部では、後期の方が回答率は高かった。やはり、教員が授業時間中に、直接、アンケートへの回答を求めることに比して、オンラインでの回答呼びかけは回答率に好影響をもたらさないようである。

現在検討中の「教員活動成果可視化制度」においても、この授業アンケートの回答率（を高める教育）が成果指標として取り上げられているように、教育の質を高めて、ディプロマポリシーを達成するためにも、この回答率を高める工夫が必要である。

以上

2020年度 学生による授業アンケート結果

9) 建築学部

①建築学部長による総評

建築学部建築学科アンケート集計結果への評価コメント

まず、設問1の出席状況であるが、毎回出席が前期94%、後期91%であり、前後期合わせると全学トップではあるが、出席している積極的な学生が回答しているともいえるであろう。設問2についても同様であり8割強の学生はシラバスに沿っていると回答しているが、読んでいない学生も7.6～16.1%いることは問題であり、授業初めの改善をはかりたい。設問3の授業満足度は満足であるとの回答が前期92.9%、後期95.6%であり、前後期共全学トップである。その理由は、理解できたことに加え、必要であることが多く挙げられたことは、授業の目的を理解していることと評価できる。設問6の予習復習では、全くしなかった学生が前期40%、後期35%おり、全学と比べても非常に多く、原因を究明して対処が必要であることが読み取れる。設問7のよりよい授業への回答は、知識・技能、知的に面白いものを求める回答が3割程度いるが、特に希望はないという回答が最も多い。設問が答えにくいのかもしれない。2021年度はコロナ禍という特殊な環境とはいえ全体の回答数が前期で35.3%、後期で20.2%と非常に低い。学生へのアンケート参加方法の工夫が必要である。

建築学部学部長 村上晶子

2020年度 学生による授業アンケート結果

10) 全学共通教育委員会

①全学共通教育委員長による総評

「全学共通教育の授業に対する評価（前期・後期）」（評価原稿）

全学共通教育委員長 山本陽子

今年の授業アンケートで特筆すべきものは、オンライン授業についてである。たとえば【設問 7】「この授業がよりよいものであるためには、どのような授業であったらよいと思いますか？」に、その他として書かれたコメントの多くが対面授業を求めるものである。

また【設問 3】「この授業に対するあなたの満足度」では、不満足とする理由の多くにコメントとして、オンライン授業であること、また急遽オンラインになったことに起因する教員側の技術的な対応の不備と、学生が対応しきれていないことへの一部の教員の不寛容さが挙げられている。ただし必ずしもすべてのオンライン授業が否定されているわけではなく、逆に満足度が高いとしたコメントの中にも、配布・配信資料や Zoom 授業を評価するものがあることも特記しておきたい。

また、課題量の多寡、学生からの質問への返答の有無や速さについてのコメントも、各分野の科目で見られた。前者は、オンライン授業の自学自習時間をどのように捉えるかという教員と学生との齟齬によって、通常時よりも問題化したものと思われる。後者は個々の教員の授業オンライン化に伴う多忙と、技術的な対応の不備に加え、大学側の学生への返答方法、およびその変更についての周知が行き届かなかったことにも因るとと思われる。

これら今年度の特異な状況下における授業アンケートは今後の貴重な資料として、教員の匿名性を高めた上で、オンライン授業の技術的・心理的な問題点や、対面授業と Zoom 授業とオンデマンド授業の効果の比較等を、データとしてより詳細に分析を行ってゆくことが必要と考えられる。

語学科目については、教員がオンライン授業に関わる機器を使いこなしているか、個々の学生のオンライン、特に Zoom の受け止め方によっても、評価はかなり異なる。今年度の語学授業において英語では共通する教材を使っているのだが、その使用方法や、レベルの差についてのコメントも少なくなかった。英語に限らず、他の語学授業についても言えることであるが、これらの必修語学授業

2020年度 学生による授業アンケート結果

に関するコメントのような情報は、少なくとも各語学科会の専任教員間で共有したほうがよいと思われる。また体育部会についても全学共通教育委員長のみでなく、体育部会所属の専任教員が閲覧できるとよいのではではないかと提案したい。

これ以外の選択科目においても、本年はオンライン教育ゆえに教員と学生の対立や不満が通常以上に際立ってしまった案件が複数あった。これらについては現在、教務事務センターとともに受講生の苦情を受け止めて、対応中である。

以 上